

ワークショップ「和紙で着物の雛形を作ろう」報告

— 館藏品理解のためのイベントについて —

三友 晶子

Report of Small Paper Kimono Making Workshops:
On Events to Understand Museum Collections

Shoko MITOMO

1. はじめに

博物館法で掲げる博物館の事業の一つに「博物館資料に関する講演会、講習会、映写会、研究会等を主催し、及びその開催を援助すること。」とある通り、教育普及活動は博物館活動の要であり、近年その重要性はさらに増している。

東京家政大学博物館では、年2回の企画展にあわせて、講演会やギャラリートーク、小物作りのワークショップや着装体験等のイベントを行ってきた。また企画展関連イベント以外にも、インドネシアの影絵芝居ワヤンの実演、館長や学芸員による博物館講座を開催している。

本稿では、その中から「和紙で着物の雛形を作ろう」というワークショップについて取り上げる。これは、当館が所蔵する最も重要な資料の一つ「裁縫雛形コレクション」への理解を深めることを目的に企画し、初めは平成22年度企画展「重要有形民俗文化財指定10周年記念 渡辺学園裁縫雛形コレクション」の関連イベントとして実施した。その後、平成26年「もっと知りたい！裁縫雛形講座」（以下、裁縫雛形講座）のうちの一回として、平成27年度には学芸員課程の博物館実習の一環として行った。館藏品理解という視点からこのワークショップを振り返り、博物館における教育普及とその実践について考えてみたい。

2. 元になった博物館資料とワークショップへの応用

(1) 裁縫雛形について¹⁾

裁縫雛形（以下、雛形ともいう）は、明治・大正・昭和期に、裁縫学校等の授業で製作された衣服や生活用品のミニチュアである。小さく作ることで材料と時間の節約になり、多種多様な衣服の作り方を学べる画期的な裁縫学習法として注目を集め、全国的に広まった。

当館では、明治30年頃から昭和18年にかけて製作された裁縫雛形を約4500点所蔵している。主に製作者やその家族からの寄贈品で、東京家政大学の前身である東京裁縫女学校、東京女子専門学

校で製作されたものが大半である。このうち、2290点が、教科書や製作用具等の附^{つけたり}61点とともに、平成12年に国の重要有形民俗文化財に指定された。

雛形製作が学校教育に取り入れられたのは、東京家政大学の校祖^{わたなべたつころう}渡邊辰五郎が「雛形尺」^{ひながたざし}を考案した明治7年頃といわれている。雛形尺は和裁で用いる「鯨尺」^{くじらじやく}を約3分の1に縮めた物差しで、雛形尺を使えば、実物と同じように製作して縮尺約3分の1のミニチュアが出来上がる²⁾。辰五郎は、それまで師匠と弟子、母と子のように一對一の関係で伝授されてきた裁縫技術を、学校での一斉授業が可能な教科として成立させるために様々な教育法を考案した。雛形製作はその代表的なものの一つである。

現存する雛形の大半は木綿製であるが、元は裁ち間違いによる布の無駄を防ぐために美濃紙が用いられた。美濃紙は、美濃（岐阜県）で産出される和紙の総称で、現在のB4版より一回り大きい。辰五郎は、美濃紙の短辺を二等分して細長く切り、それをつなげて反物に見立てた。美濃紙6枚で大人の着物、2枚で子供の着物ができる。この紙の反物で着物等を仕立てる際の便利な道具として、雛形尺が考案された。雛形尺の1尺（10寸）は、紙の反物の幅（美濃紙の短辺半分の長さ）であり、それは鯨尺の3寸5分に相当する。つまり実寸法である鯨尺の約3分の1になっているのである。

和紙の雛形は、布の雛形に比して現存する数が少なく、そのほとんどが袴の襷の畳み方である。数と種類の少なさから、雛形が盛んに作られた時期（明治後期から昭和初期）に和紙を用いる機会には限られていたことが推測されるが、おそらく雛形が考案された初期段階では、布での製作に入る前の工程として重視されていたと考えられる。

(2) ワークショップへの応用

ワークショップは、実際の雛形製作のエッセンスを残しつつも、2時間程度で、来館者が気軽に参加できる内容が望ましい。裁縫雛形の最大の特徴である「ミニチュアサイズ」という点に着目し、雛形尺の原理を取り入れて製作を行うことに決めた。押さえるべきポイントとして、次の4点が浮かび上がった。

①雛形尺を用いる。②単位は尺貫法（尺・寸・分）を使用する。③渡邊辰五郎が著した（遺稿含む）教科書を基にする。④縫い方の練習ではないため、布でなく紙を用い、のりで接着する。ただし、「紙を反物に見立てる」工程を取り入れる。

以下で、①～③について詳しく述べていく。

①雛形尺を用いる

雛形尺は、前述の通り、渡邊辰五郎が明治7年頃に考案した縮尺の物差しである。この年、辰五郎は千葉県の長南小学校に授業生試補として招かれ、裁縫の授業を担当するようになった。そこで必要性から、雛形尺が生まれたものと考えられる。初めは辰五郎が竹を伐り出してやすりで目盛りを入れ、辰五郎の妻くになが墨を入れたものを生徒に配ったという。明治24年の度量衡法の制定で私尺の使用が禁止されたが、辰五郎は農商務省に何度もかけあい、学校での用途に限り使用を許

された。計器の一種として認められた雛形尺は、検定を受け、製造・販売された。大正10年の度量衡法改正でメートル法に統一されると、鯨尺の縮尺である雛形尺の有効性は薄れ、雛形製作はメートルを単位として続くものの、製作数は次第に減少していった。

雛形尺は鯨尺をもとにしているため、単位は尺・寸・分である。鯨尺は二尺差しが一般的で、雛形尺も二尺差しになっている。雛形尺2尺（20寸）は鯨尺の7寸に相当する。つまり20分の7で約3分の1の縮尺になるわけである。

雛形尺を用いると、3分の1にするために計算をする必要はなく、実物の寸法をそのまま取っていけばミニチュアができあがる。特に和裁では、標準寸法が頭に入っているか否かは作業効率に影響するため、雛形尺を使ったこの方法は、実物とまったく同じように製作できる点で非常に有効だった。

雛形尺は、辰五郎が考案した、渡辺式裁縫教授法の特徴といえる。例えば、辰五郎と同時代に裁縫教育の分野で活躍した仙台の朴沢三代治は、自身の開いた裁縫学校で雛形を製作させているが、雛形尺を使用していない。鯨尺の2寸を1尺に見立てて5分の1、1寸を1尺と見立てて10分の1、という方法で縮尺を取っている³⁾。

したがって、雛形尺を実際に使ってみることが、本学の裁縫雛形の成り立ちを体験する最良の方法であると考えられる。雛形尺は当館で8点収蔵しているが、これらを使用することは資料保存上望ましくなく、また雛形尺は現在市販されていないため、雛形尺の写真を原寸大でコピーし、厚紙に貼り、物差しとして使用できるものを作成した。

雛形尺、つまり約3分の1で着物を試作したところ、大き過ぎて取り扱いが難しく、作業スペースの面でも問題があるため、さらに半分の約6分の1で製作することにした⁴⁾。雛形尺を2分の1に縮めるのではなく、雛形尺自体の長さは変えないで、雛形尺の1尺を2尺に見立て、4尺まで測れる「雛形尺の1/2物差し」を準備した。(写真2)

②単位は尺貫法（尺・寸・分）を使用する

雛形尺を使用するという事は、尺貫法で製作するという事である。大正10年の度量衡法改正でメートル法に統一することが定められたが、その後数年間は、両方の単位が混在し、徐々にメートル法へ移行していった。

雛形製作の場合、明治期の本格的な洋装にはインチ尺、大正末から昭和期は和装洋装問わずメートル尺が使用されているものの、多くは尺貫法で製作されている。着物や袴といった和服はもちろん、シャツやズボン下、運動着や西洋前掛等の洋服も寸・尺・分で仕立てられている。

尺貫法を使用していれば、ワークショップで製作するアイテムとしての条件を満たしていることになるが、難易度や出来上がったときの満足感等を考慮して、女性の着物を製作することとした。

③当時の教科書を基にする

裁縫雛形は、「裁縫雛形の作り方」があるわけではなく、あくまで実物の製作方法にのっって

いる。ワークショップで製作する紙の着物の寸法や裁ち方は、渡邊滋著『渡邊裁縫講義：渡邊先生遺稿：普通部』（明治43年発行）を参考にした。

「はしがき」によれば、本書は渡邊辰五郎が大日本女学会発刊の雑誌に長年にわたって書き続けた記事を、辰五郎の長男で二代目校長の渡邊滋が訂正・増補してまとめたもので、「普通部」と「高等部」の二冊に分けて刊行された。雑誌掲載時は、裁縫を本格的に学んだ経験のない主婦のために、家族や自分の衣服を仕立てる際に必要な内容を分かりやすく指導することを目的としていた。これをまとめるにあたって、渡邊滋は「家庭にありて師とたのむべき良書」が少ないことから「世の就学し得ざる者 此書によりて裁製縫紉の術を学ぶことを得ば 亡父の満足編者の悦何ものかこれに過ぐべきかは」⁵⁾と書いている。

したがって、主として裁縫の専門家を養成する本学において、本書は教科書として採用されておらず、より高度な内容の裁縫書が使用されていた。しかしながら、教科書として使用された辰五郎の著書『普通裁縫教授書』（明治13年）、『裁縫教科書』（明治30年）、『渡邊先生遺稿 新裁縫教科書』（明治41年）にあたったところ、筆者の和裁経験（浴衣を仕立てたことがある程度）では内容を十分に理解し、応用することは困難であった。唯一、参考にできるのが『渡邊裁縫講義：渡邊先生遺稿：普通部』だったのである。図らずも、辰五郎が対象者のレベルに合わせて内容を書き分けていたことが実感され、興味深いのが、これについては別の機会に考察することにする。

3. 準備

要点として挙げた①～④を踏まえ、特に和裁の知識や技術を持たない一般の方が、90～120分程度で完成させることができ、かつ充実感を得られるようなワークショップを目指した。

事前の準備として、材料と道具を揃える他に、プリント、スライドショー、見本の作成を行った。

(1) 材料・道具：和紙、雛形尺、スティックのり、はさみ

和紙は、白い美濃紙を使用する案もあったが、出来上がりが着物らしく見え、目にも楽しい友禅紙を選んだ。柄あわせの必要がないように、小さく方向のない柄を4種程度用意した。

この和紙を、反物のように細長い状態にする。反物は普通、並幅（鯨尺約1尺）、長さ1反（鯨尺2丈6尺～2丈8尺）で、センチ尺に直すと、幅は約36cm、長さは約10mである。この約6分の1ということで、幅6cm長さ170cmになるように紙を切ってつなげた。

雛形尺は、雛形尺の写真に、パソコンの画面上で「雛形尺の1/2」の目盛りを振り、原寸大でプリントアウトし、厚紙に貼り、物差しとして使用できる形にした。

(2) プリント

前述の通り、寸法と裁ち方図については『渡邊裁縫講義：渡邊先生遺稿：普通部』を参考にした。ただし、材料に無駄が出ないように多少寸法を変更している。

製作工程については、当時の裁縫書は図や解説が少ないため、現代の和裁の教科書『被服平面構

成』⁶⁾も参考にしながら、和紙で製作しやすい方法に改変した。着物自体に馴染みのない方の参加を想定して、着物の各部分の名称を示した図を載せた。これらを、A3用紙両面1枚にまとめ、参加者に配付した。(図1)

(3) スライドショー

ワークショップの進め方として、各自が自由に作業するのではなく、各工程で区切って、解説をした後に製作に移るという方法を取った。初めてこのワークショップを行った際は、テキストに沿って解説し、必要に応じてホワイトボードに板書した。平成26年の裁縫雛形講座では、参加者が多数だったこともあり、MicrosoftのPowerPointでスライドショーを作成した。製作工程だけではなく、その前段階として、裁縫雛形についての解説を盛り込んだ。

(4) 見本

ワークショップを行う際に、見本は非常に重要である。完成品だけではなく、ポイントとなる工程ごとに、その時点での状態を示した見本があることが望ましい。裁断に入る前の畳み方の見本、衿つけ前までの見本、完成品の3種を用意した。衿つけ前までの見本と完成品は4～5人に1つ程度、畳み方については不要な原稿用紙を使用して多めに作成し、2人に1つ程度いきわたるようにした。

4. 実施

和紙による着物の雛形作りは、これまでに3度行う機会があった。平成22年度企画展の関連イベント、平成26年開催の裁縫雛形講座、平成27年度の博物館実習である。各回とも基本的な製作工程は(回を重ねるごとに改良を加えつつ)同じだが、対象や実施の意図にあわせてワークショップ全体の構成を多少変えている。以下で、各回の概要と、特に意識した点等について述べていく。

(1) 企画展関連イベントとして

- ・開催日……平成22年10月28日、11月6日
- ・タイトル…「和紙の雛形づくりに挑戦！」
- ・所要時間…2時間
- ・参加人数…1回目12名、2回目10名
- ・当日参加受付、参加費無料

平成22年度企画展「重要有形民俗文化財指定10周年 渡辺学園裁縫雛形コレクション」の関連イベントとして行った。初めてのワークショップということで、定員は少人数の10名に設定。材料に余分があったため1回目は希望者12名全員参加となった。主に筆者が解説し、アシスタントとして他に学芸員が2名付いた。裁縫雛形についての説明は、各々企画展を見学していると仮定して、ワークショップの中では行わなかった。当館のイベントのリピーターの他、和裁に親しんでいる年

配の方の参加が目立った。ゆとりのある人数設定だったためか、時間内に全員が完成させることができ、揃って記念撮影をする余裕があった。

(2) 「裁縫雛形講座」の一コマとして

- ・開催日……平成26年11月29日（土）
- ・タイトル…「和紙で着物の雛形を作ろう～どうやって小さくするの？」
- ・所要時間…90分
- ・参加人数…24名
- ・事前申し込み制、参加費無料

3回にわたって実施した「裁縫雛形講座」の第2回目。第1回目と第3回目は講義形式（座学）で、それぞれ「裁縫雛形とは～小さくてかわいい、だけじゃない!」、「雛形が作られた時代の衣生活」という内容で行った。1回のみ参加も可としたところ、第2回目の申し込みが一番多く、ワークショップ形式（体験型イベント）への関心の高さがうかがえた。

通常行っている小物作りのワークショップは手芸や工作を趣味とする参加者が多いが、裁縫雛形講座と銘打ったこのワークショップでは、3回全て受講された方をはじめ、裁縫雛形に興味を持っている方の参加が目立った。はさみやのりを使うのは久しぶりという参加者もいたが、寸法どおりに測り、工程通りに組み立てていけば出来上がりにそれほど個人差が出ないことが分かった。

裁縫雛形講座の一コマである点にこだわり、雛形尺の原理や効用について解説した後に製作へ進んだ。他の回にあわせて90分間としたことで、時間に余裕がないことは予想していたため、筆者がやや早めのペースで全体説明を行い、作業が遅れている方はアシスタントの学芸員が指導に当たった。しかし、事前解説に時間を取ったため、また参加人数が多かったため、90分で完成できたのは2、3名だった。30分延長し、ほぼ全員に残っていただいて完成にこぎつけた。

(3) 博物館実務実習の一環として

ワークショップとは異なるが、今年度当館で博物館実習を受けた学生を対象に、実習の一環として行った。ワークショップ本来の目的である「裁縫雛形への理解を深める」に加え、「和装・和裁の基礎的知識を養う」、「ワークショップの企画・実施について体験する」という点に意識を置いた。博物館実習は、受講者74名を6グループに分けて行う。つまり、12名前後の学生を対象に計6回実施することとなった。

まず、常設展示室で裁縫雛形を鑑賞しながら15分程度解説し、その後教室に戻って製作に入った。一般向けのワークショップでも、実物の着物を使って着物の構造や部分名称の確認を行っていたが、実習生にはより時間をかけて解説した。

アシスタントなしで筆者が一人で指導にあたった回は、一人一人に目を配ることができず進捗に差が出たが、途中で10分程度の休憩をはさむことで足並みを揃えることができた。

製作工程の説明以外の解説にかける時間が多くなったため、休憩時間を含め、全員完成までに2時間40～50分を要した。

5. 参加者の反応と今後の課題

(1) 裁縫雛形への理解を深める

参加者からは「最初は雛形尺の扱いに戸惑ったが、使っているうちに便利なものだとわかった」「雛形尺を考案した渡邊辰五郎は素晴らしい」「実際に雛形尺で作成したのは初めて、理解が深まった。」等の感想をいただき、主催者の意図は概ね伝わったという感触を得た。

特に雛形尺を持ち帰ることができる点が好評で、「自宅でも作ってみます」という声も聞かれた。また、「雛形尺ではなく鯨尺で作れば実物大のものができる」「今回は約6分の1で作ったが、目盛りの読み方を元通りにすれば約3分の1の雛形ができる」等の感想が出ると、周囲の参加者がうなずいて同意する場面も見られ、裁縫雛形の解説の中でも特に苦勞する縮尺について、経験的に理解していただいた様子が印象的であった。

「着物だけでなく袴や羽織を作ってみたい」「布で製作してみたい」という意見も複数あった。いずれも大幅なレベルアップとなるため、時間と人員の見直しが必要であり、特に現時点では講師（筆者）の指導力不足の問題が大きい。これらの点が解消されれば、シリーズ化の展開の仕方として、製作するアイテムを変えるのは一つの方法である。多種多様な衣服が製作されていることは裁縫雛形の特徴であり、大きな魅力に違いないので、実施の可能性を探っていきたい。

(2) 和服・和裁への入門として

和服や和裁の入門編として効果的だったことが、アンケートからうかがえた。アンケートは、裁縫雛形講座の際に実施したものである。自由記述欄に書かれたコメントを以下に紹介する。

- ・和裁はなかなか機会がなく、また敷居も高い気がして、二の足を踏んでいましたが、このような講座のおかげですんなり学ぶことができました。
- ・とてもきれいにできて、着物の成り立ちが良くわかりました。またいくつか作ってみたいと思います。
- ・和紙とのりで着物ができる！とても楽しいプランでした。
- ・もっと着物について知りたいし、子供たちに教えてたくさんの方が生活の中で着物を着ていけるようになったらと思います。また参加したいです。
- ・とても勉強になりました。家に帰り、もう一度母と作りたいたいと思いました。また、高校生向けにこのレクチャーをされるとよいと思いました。

日常的に和服を着用したり目にしたりする機会が少なくなった今、意識的に和服文化を見直そうとする動きがある。特に、平成18年改正の教育基本法の中で「伝統と文化の尊重」⁷⁾が掲げられたことを受けて、中学校技術・家庭の学習指導要領に「和服の基本的な着装」⁸⁾が盛り込まれ、着

付けを授業に取り入れる学校が増加した。着付け等に加えて、ワークショップを行い着物の構造や作り方を知ること、一枚の布を無駄なく裁って着物の形に仕立てた先人の知恵を体感することができるのではないだろうか。

今回のワークショップでは、裁縫雛形の解説に重きを置いたため雛形尺や尺貫法を用いたが、場合によってはセンチ尺の縮尺を用い、反物を寸法どおりに畳んで片方の折り山を裁つと各部分に分かれる、といった和裁の面白さにポイントを絞った方が効果的と思われる。所要時間や参加者のレベルを考慮し、要点を押さえつつ作業工程を簡略化することで、小中学生や高校生、また日本文化を学ぶ留学生等を対象としたワークショップとして成立させることを今後の課題としたい。

6. おわりに

博物館で行うイベントは、展示だけでは伝えきれない資料の特徴や魅力を紹介し、楽しみながら理解してもらう大切な機会である。館蔵品を活かすイベントを行うためには、資料の特性を知り、そのエッセンスを守りながら、対象者、時間、人員、予算等の条件に応じて工程を吟味し、参加者がその場の雰囲気を楽しめるような余裕のあるプランを立てることが重要である。今後も、満足度の高い内容を目指してイベントを企画・実施し、博物館の利用を促したい。

最後になりましたが、当館の活動に関心を持って、意見や感想を寄せてくださったワークショップ参加者の方々に御礼申し上げます。また、見本やプリントの作成等の準備作業から、当日の指導にいたるまで、細やかなサポートでワークショップを盛り上げてくれる当館館員に心より感謝の意を表します。

註

- 1) 裁縫雛形については、重要有形民俗文化財 渡辺学園裁縫雛形コレクション. 上・下巻, 東京, 東京家政大学博物館, 2001, 上巻 179p, 下巻 1207p に詳しい。
- 2) 時代や学習目的に応じて縮尺1/2、1/4、1/5、1/6で製作される場合もあった。
- 3) 朴沢学園裁縫教育資料集. 仙台, 学校法人朴沢学園, 2012.
- 4) 実際の雛形製作においても、蚊帳や幕といった生活用品は雛形尺では大きいため、雛形尺の1/2寸法で製作されることが多かった。
- 5) 渡邊滋, 渡邊裁縫講義: 渡邊先生遺稿: 普通部. 東京, 東京裁縫女学校出版部, 1910, p2.
- 6) 東京家政大学被服平面構成研究室, 被服平面構成. 東京, 生活研究会, 1986.
- 7) 教育基本法 第1章第2条第5号.
- 8) 中学校学習指導要領 第2章第8節.



写真1. ワークショップで製作する
和紙の着物の雛形

写真2. 雛形尺と雛形尺の1/2の物差し
(紙面の都合上75%に縮小)

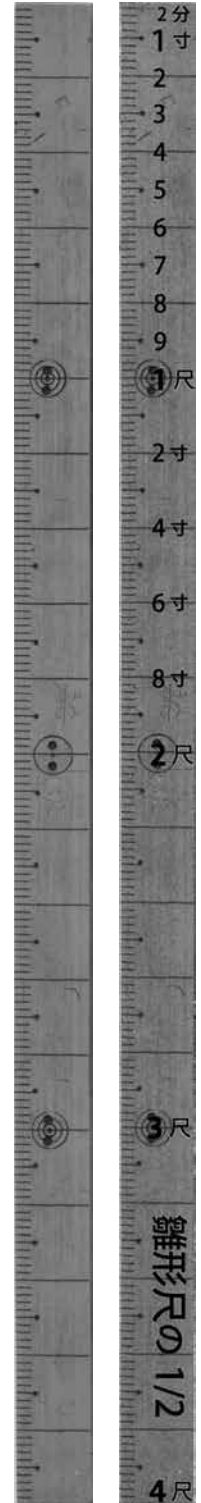


図1. 配付プリント

東京家政大学博物館

「和紙で着物の雛形を作ろう—どうやって小さくする?」

★「雛形尺」の原理を応用し、実物の約1/6寸法で、女性の着物を作ります。
 ★使用する単位は「尺・寸・分」です。(1尺=10寸、1寸=10分)
 ★「渡辺先生道稿 渡邊裁縫講義：普通部」(明治43年刊)を参考にしています。

1 裁ち方

①寸法どおりに布にしるしをつける ②たたむ ③裁つ の順に進めます。

①しるしつけ ※裏(柄のない面)にしるしつけ

②たたむ ※表(柄のある面)が上になるようにする

③裁つ…右側の「わ」のみ裁つ

①	袖丈	1尺6寸
②	身丈	3尺8寸
③	衿丈	4尺3寸
④	共衿丈	2尺5寸
⑤	衿丈	3尺4寸

【着物の各部分の名称】

2 衿肩明を切る

①首を出す部分です。肩山によって中心から3寸5分切り込みを入れる。

【衿肩明の拡大図】

【身頃と袖(裏面)】

【衿(裏面)】

【共衿(裏面)】

3 のりしろを折る

…上図で灰色の部分がのりしろになります。以下の寸法どおりに測り、のりしろの部分裏面側に折りたおす。

- ①後身頃の背 … 1寸
- ②後身頃の脇 … 後幅(7寸5分)と①を引いた余り
- ③前身頃の脇 … 後身頃の脇と同じ幅
- ④袖下 … 1寸
- ⑤衿 …
- ⑥衿 … 4寸を引いた余り
- ⑦共衿 …

4 身頃、袖をはり合わせる

①後身頃…背ののりしろ同士をはり合わせたあと、のりしろを左身頃側に倒す。
 ②袖つけの部分を作る…肩山から6寸5分を測り、のりしろの部分のみ切り込みを入れる。(計4箇所)
 ③身頃…身頃の脇をはり合わせる前に、袖つけから下に3寸測る。この部分は「身八ツ口」になるので、両脇をはり合わせる際にのりをつけない。
 ④袖をつける…袖下をはり合わせる。身頃の袖つけに袖をつける。

【身頃(裏面)】

【身頃と袖(表面)】

5 衿つけ

①前幅6寸をはかり、しるしをつける。

6 衿つけ

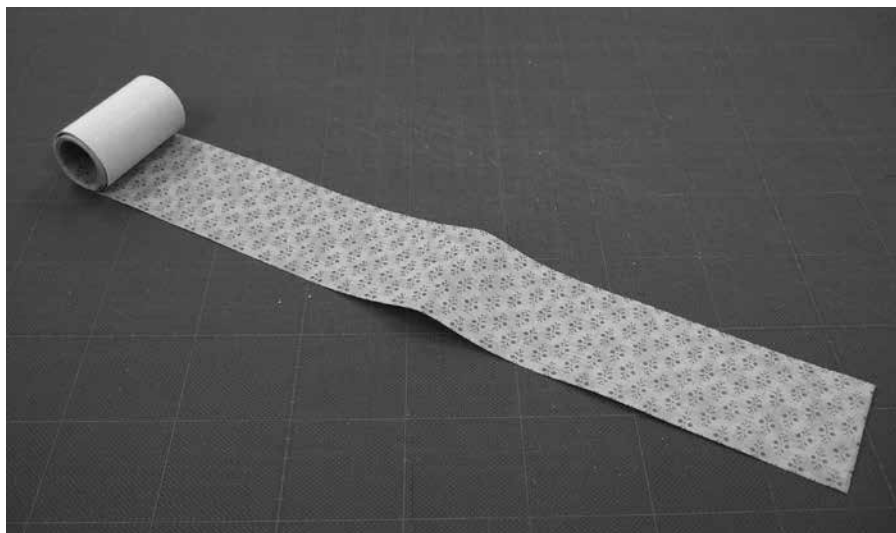
①衿の裾から2尺上がったところ(☆=衿下)と、肩山から6寸下がったところ(★=衿下がり)にしるしをつける。

7 共衿つけ

①衿と同じように折る。
 ②中心を衿の中心に合わせ、衿にそってはりつける。
 ③衿を包み込むようにし、数か所のりではって安定させる。

【できあがり】

写真3. ワークショップの様子



反物状にした和紙



寸法どおりに畳み、裁つ工程



袖と身頃が付いた状態



企画展関連イベントの様子（平成22年）



裁縫雛形講座、開始前の様子（平成26年）
スライドショーを導入した。